

## 巻頭言

## 様変わりする書籍の世界

図書館情報センター館長 寶多 國弘



2010年は、わが国の「電子書籍元年」といわれています。20年前から専用端末で読む電子書籍が登場していましたが、印刷会社・通信会社・電機メーカーが相次いでネット書店をオープンし、総数20万点以上の書籍や雑誌のネット配信サービスが開始され、いよいよ本格的な電子書籍時代が幕開けしたことを意味します。現在の電子書籍市場は650億円程度(2011年)ですが、高機能・使い勝手の良い端末の普及や電子書籍のコンテンツの充実によって、ここ数年のうちに2千億円市場に拡大成長すると予測されています。

一方、紙の本についてみれば、新刊書籍の年間発行数は78,902点(2011年、『出版年鑑』)であり、毎日約216点の「新製品」が市場に送り出されたこととなります。重版や改訂・増補版の「改良商品」を含めた書籍の生産量である総発行部数は13億1,165万冊(推定)で、国民1人当たり約11冊の割り当てとなります。さらに、雑誌を加えた活字出版物の総出回り部数は、44億4千万冊超と推定されています。総発行部数はもちろん出版物の種類を示す総発行点数についても、わが国は世界屈指の出版大国であると言えます。また、出版文化が識字人口に支えられているとなれば、出版物の発行部数は、その国の教養・文化水準を示すバロメーターであるということが出来ます。ところで、書籍・雑誌の総売上高(推定)が1兆円を超えたのは1976年であり、以後も増加を続け1989年には2兆円市場に拡大しました。しかしながら、総売上高は1996年の2兆6,980億円を、総出回り数は1997年の67億9,729万冊をピークに、一転して減少(前年割れ)の一途を辿り、現在は、いずれもピーク時の3割超の落ち込みで、長期低落傾向にあります。

電子書籍の登場は、グーテンベルクの活版印刷の発明以来、出版の歴史に500余年ぶりの大変革を起こしつつあります。電子書籍の普及は、出版業界はもちろん、われわれの読書スタイルに大きなインパクトを与えるであろうことが広く指摘されています。

これまでに登場した生活の利便・簡便化、快適化、効率化等を実現した画期的な新製品(文明の利器)が、予想どおりのポジティブなインパクト(プラス効果)と同時に、予期せざるネガティブなインパクト(マイナス効果や新たな問題)をもたらしたことはよく知られています。音楽のネット配信サービスが音楽業界を激変させた先例に照らして、「書籍の『紙』から『電子』への流れは止められない」、「電子版が紙版に取って代わり、これまでの出版文化が廃れるのではないか」との懸念が広がっています。その一方で、アメリカに見る電子書籍の拡大が出版全体の活性化につながっているように、両者の相乗効果による市場の拡大・活性化へ大きな期待が寄せられています。

読者にとっては、読書手段の選択肢を増やしてくれる電子書籍の特性(長所、短所)やもたらすであろうプラス効果とマイナス効果の同次元評価を通して、電子書籍と紙の書籍それぞれの役割を見定めつつ、各自の読書生活にどのように取り入れるか、そして上手な付き合い方ができるように、相応の楽しい気構えが必要になってくるように思われます。